

女子大國文

第百六十七号

令和二年九月発行

女子大國文 第百六十七号

令和二年九月発行

京都女子大学国文学会

彙

報

(四三)

曾禰好忠「毎月集」二番歌の一考察……………藤原静香(一)

——海人への自己投影表現をめぐって——

翻刻 京都女子大学図書館蔵

『「社寺縁起由来」』収載一枚刷略縁起二十点…中前正志(一九)

女子大國文

第百六十七号

令和二年九月十五日 印刷
令和二年九月三十日 発行

〒605-8501 京都市東山区今熊野北日吉町三番地
編輯兼 京都女子大学国文学会
発行者

電話 〇五―五三―一九〇七六
FAX 〇五―五三―一九二一〇
振替 〇〇〇―五―一三一四

〒602-8504 京都市上京区上長者町通黒門東入
印刷所 西村印刷株式会社

電話 〇五―四四―四一〇八(代)
FAX 〇五―四三―六二八二

京都女子大学国文学会

彙報

着任のご挨拶

中島 和歌子

○女子大國文第一六七号をお届けします。

○新型コロナウイルス感染症拡大を予防するため、今年度前期に予定されていた以下の諸行事は全て中止となりました。

・優秀論文発表会（二〇二〇年五月九日（土）開催予定）

・新入生歓迎行事（五月三〇日（土）開催予定）

・公開講座（六月二六日（金）開催予定）

研究室だより

○四月より新任として、中島和歌子先生をお迎えいたしました。

ご専門は和漢比較文学、『枕草子』、陰陽道等です。本号に御就任のお言葉をいただきました。

○本学科教授をお務めになりました塚田満江先生（本学名誉教授）が逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

○宮崎三世先生が四月一日より京都大学での一年間の国内研修に出ておられます。

○本年度の文学部国文学科主任、および国文学会代表幹事は坂本信道先生です。川島朋子先生・池原陽斉先生とともに、国文学科・国文学会の運営にあたっておられます。

漢文学の滝川幸司先生の後任の中島和歌子と申します。約四半世紀勤務した北海道教育大学札幌校という所から、二〇二〇年の「世の中、騒がしきころ」に参りましたので、ほとんどの学生の皆さんには未だお目にかかれていません。「京女ポータル」のLMSを通じて、受講生の皆さんと文字のやり取りはしておりますが、教壇に立つことの無いままのご挨拶となりました。このように着任したという実績が乏しいとは言え、私自身といたしましては、甚だおがましいのですが、様々な意味で「古巣に帰った」という感覚があります。

そう感じる理由の一つとして、いくつかの研究会（例えば陽明文庫や思文閣会館等での『御堂関白記』の講読会）やアルバイト（『平安時代史事典』の校正）などで京都に通っていたことのほかに、一九九四年の夏、札幌に引越す直前まで、京都女子大学の短期大学の国語・国文専攻で非常勤講師をさせていただいていたということがあります。「平安建都千二百年」の節目の年で、京都が大変賑わっていました。京都国立博物館では「王朝の美」という記念特別展覧会が開催されており、必ず観に行くべきだと

いうことを『枕草子』の授業中に何度か言ったところ、案内を頼まれて、受講生のうちの何名かと一緒に観に行ったことが、私の京都での大切な思い出の一つです。

彼女たちの積極性や探究心に感心すると共に、放課後、体育の授業を終えて坂道を駆け下りればすぐに入館ができる地の利を、改めて素晴らしいと感じました。校舎が東山の麓に点在しているので、京博もキャンパスの一部といってもよいくらいですね。京都の大学は自学自習の材料が豊富にあります。京女はその中でも特に恵まれているのではないのでしょうか。例えば、札幌では図録で見えていた藤原道長が寛弘四年に吉野金峯山に埋めた経筒も、京博で常設展示されています。一回生は、この原稿を書いている七月現在、未だ大学に来ることができていないのですが、通えるようになったら是非この特権を行使してほしいと、一回生のアドバイザー二人のうちの一人としても思います。

なお短大の非常勤講師は、札幌への赴任のために途中で退職させていただきました。当時、各方面にご迷惑をおかけしたことで存じます。改めてお詫び申し上げます。確か『御堂』の会の時に非常勤を依頼して下さった加納重文先生には、直接ご挨拶に参りました。本誌の第百六十四号に掲載された坂本信道先生の加納先生追悼文によりますと、先生はよく坂本先生に叱られていたそう

ですが、私はその加納先生に、「もっと大きな仕事をしなさい」と、近年は主にお葉書で、叱られ続けていました。お応えできなかったことが大変悔やまれます。今からでも、加納先生や他のお世話になった、また今もお世話になっている先生方の御恩に報いることができるように、精進せねばと思っております。学生時代から藤本一恵先生他の先生方の玉稿を拝読してきた『女子大文』にも、拙稿を掲載していただけるよう努力する所存です。

さて、そのご挨拶の時に伺った先は、研究室よりも広がったので文学部長室だったのでしよう。J校舎が建って間もない頃で、A校舎とは異なり、どこもかしこも光り輝いていました。今年四月一日、学科主任として改めて迎えて下さった旧知の仲の坂本先生が、「J校舎の老朽化を見るたびに、自分と中前さんが年を取ったことを感じる」とおっしゃいました。もちろんそれは、文学部の歴史の積み重ねとも言えるでしょう。ただ私の場合は、校舎の変化に、自分が生まれ育った関西にいかなかった時間の長さを改めて感じております。

この間に様々な変化がありました。京都については、大小の宿泊施設が非常に増えていることに驚きました。逆に、少子化による全国的な傾向ですが、小学校がかなり減ったのです。高校生か大学生の頃、「有隣」という校名を初めて知った時に、自分

の住む阪神間の学校とは命名法が違ってカッコいいなあと思いましたが、既に一九九二年に失われていました。馬町にあった「修道」を含め、四書や平安京に基づく校名は、寺社や近代の洋風建築などと共に京都の歴史が感じられる要素の一つであっただけに、他の学校の統廃合以上に残念に感じられます（但し地区名としては残っていることを、最近の大雨による避難情報で知りました）。

さてその一方で、暮らしてみると、京都には古いものがかなり多くそのまま残っていることにも改めて気づきました。何を今さらと思われるかもしれませんが、古いものというのは、昭和の暮らしのことです。露地、板塀、格子戸、簾といった見えるものだけでなく、畳や仏壇などの匂い等々が私の子ども頃の頃とほとんど変わらず、今はまだ記憶の中にしか無いと思っていたものが現実存在するとわかり、嬉しくなりました。

また大学については、私の出身大学も六甲の山の麓に点在していて、教職科目を受けた後に文学部に戻るために坂道を昇り降りしたり、重い部活の道具を持って急な階段や舗装されていない近道を歩いたりしていたので、在学生の皆さんの移動の大変さがある程度は想像できます。毎日定時に近くから鐘が聞こえることも同じです（宗教は別）。

学部も、長年勤めた教育学部から文学部に戻りました。両学部には様々な違いがありますが、研究室の番号が偶然同じ412だったことから、何か継続すべきものがあるように感じています。

京女での授業は、文字だけのやり取りとは言え、「演習」での各発表レジュメに対する鋭い質問や的確な意見の書き込みなどから、受講生の皆さんの読解力の高さが伝わってきました。知識を今以上に蓄えると、判断材料が増え、自説をより相対化でき、説得力がさらに増すのではないでしょうか。

特に平安文学に関しては、山の植生を含め当時と表面は変わっていても、まさにここが舞台でした。山谷や川の流れ、花鳥風月の多くはそのままなので、よく観察すれば描かれたのと同じものを直接知ることができますね。例えば鶯も、J校舎の裏の谷で春告げ鳥として鳴き始め、暑中の今は、三回生の「演習」で出てきた「残鶯」として存在をアピールし続けています。

但し、鶯が春を告げず、梅が桜より後に咲き、陰暦五月は爽快で、雪が儼く消えることのない札幌でも、平安文学が好きな学生が何人もいて、卒業研究などに取り組んでいます。言いたいのは、実地を知らなければ理解できないということではありません。そもそも私が担当する漢文学は、日本漢文もありますが、多くは中国で生まれました。古典には時空を超えた普遍的な魅力が

あり、実地に行けばさらなる発見があつて理解がより深まるだろうという、当たり前のことです。

実地で観察できることに加えて、周辺分野を含めて広く学べることも、京女の魅力の一つですね。私の博士課程での指導教官も、主は国文学でしたが、副は中国文学、日本史、東洋美術史の先生方でした。言語文化を含め、文化には様々なつながりがあるので、学際的に学べたことは良かったと思つています。その結果、漢文日記や陰陽道書など、正統とは言えないものを主に読んでいたのですが、それらも対象として「漢文」の多様性を伝え、今昔、雅俗、和漢などをつなげることをめざしたいです。

これまで、教職員の方々をはじめ、学生の皆さんにも、種々助けられたり教えられたりして何とか過ごしてきました。ありがとうございます。共に学び続けながら、国文学科、学会の役割に立てるよう励みたいと存じますので、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

二〇一九年度（令和元年度）論文題目

卒業論文

博士論文

上代

源氏物語の表現と和歌 — 後撰集を起点とした展開 — 朝日真美子

『萬葉集』の「影」 — 「渡る日の影」と「朝日影」を中心に — 浅房 実奈

修士論文

上代における鳥の鳴き声 — 記紀萬葉の鳥と雉を中心に — 大澤 真子
萬葉集二八九六番歌の研究 — 「不落」の訓み方を中心に — 久保 千宙

谷崎潤一郎「魔術師」に描かれる架空の街 稲垣あやか

挽歌から哀傷歌にかけての植物の詠まれ方の変遷 — 「モミチ」と「サクラ」に注目して — 小林 未来

— 燦爛たる異空間の演出 —

『木幡の時雨』の『源氏物語』夕顔巻の受容

松村 美咲

— 「五条わたりのあばらや」と八月の時雨 —

ヤマタノオロチ研究 — 『古事記』の創作性を巡って — 谷 祐希
『万葉集』の「卯の花」 — 「卯の花」の季節は夏であるのか — 谷田 和奏

万葉集の水辺の景 — 他界意識を中心に — 辻 萌佳

歌ことば「恋死」の研究 — 『萬葉集』と三代集を中心に — 中西 彩華

『萬葉集』相聞歌における「色」の研究 — 白のイメージを中心に — 萬 理沙

中 古

「仲忠涼論争」とは 『枕草子』から見える女たちの遊戯

伊藤 千尋

恋の仲立ちをする「都鳥」―中世の文献との関わりから―

梶山 柚輝

『源氏物語』における柏木の変化

萩原ひなた

―女三の宮密通物語の転換点―

深川本『狭衣物語』を読む

藤田 知香

―「ある本」と揺れる飛鳥井の女君像―

現代日本の靈魂観 ―盆の衰退と受け継がれる灯笼―

舛井 絵梨

『源氏物語』における葵の上の役割

光嶋 萌子

―婚姻制度との関わりから―

形見として機能する笛

山中 美樹

―『源氏物語』と『浅茅が露』を中心に―

梅と橘のなつかしさ ―『万葉集』と八代集を中心に―

山道 百香

平安時代中期の和歌文学における女性歌人について

佐藤みのり

藤原実方考 ―和歌から見る人物像―

杉中はるな

『古今和歌集』における梅の花の香りについて

東瀬 文

式子内親王像の形成と和歌

松本 成葉

―古注釈書における変遷を中心に―

平安時代を中心とした尼の和歌について

山口 真穂

『新古今和歌集』における夢

幸 茜

―過去との結びつきを中心に―

中 世

義経伝説における天狗 ―『義経記』と鞍馬天狗伝説―

岡本 彩加

病を舐める聖人 ―聖人治療説話の考察―

紫雲 響子

江戸時代における稲荷信仰について

三宅 優奈

子育て幽霊と産女の怪異の語られ方

安達 由莉

鞍馬天狗の神格化と兵法伝授

伊藤 静香

―毘沙門天との関係性をめぐって―

今様往生論と遊女の往生について

奥田佳名子

―『梁塵秘抄』から考える今様往生観―

冥界からやって来た使者の「鬼」

佐々木葵衣

―『日本霊異記』中巻二十四・二十五縁を中心に―

『宇治拾遺物語』と『今昔物語集』の違い

篠原 友子

―「虎鰐説話」を中心に―

武力による猿神退治

清水 早紀

『撰津名所図会』の構成 ―温泉を中心に―

鈴木 暖乃

名所・鳥羽恋塚をめぐって ―『恋塚物語』を中心に―

仲 美月

日本における闘茶の発展

播磨国と陰陽師の繋がり

—『今昔物語集』巻第十四第四十四話を巡って—

『今昔物語集』巻第十五第十九の時間概念について

『方丈記』の主題について—都と閑居の無常—

地蔵盆の目的—京都府の地蔵盆を中心に—

中世の異類婚姻譚における結末とその例外

—結婚観・女性観からの考察—

狂言に描かれるわわしい女たちについて

狂言『はりだこ』考—曲中にみられる祝言性について—

中央能楽界における鸞流狂言の廃絶と佐渡鸞流

狂言「因幡堂」考 因幡堂のあり方、女性像を中心に

狂言「八尾」考—閻魔王と八尾地蔵の関係について—

清水寺の西門について—狂言と『お伽草子』を中心に—

『首引』考—印南野を中心に—

能楽における後シテの同一性

西内 絵理

野川 夏実

服部 恭子

平林華名子

御園生いろは

森山満奈美

稲数 麻理

大竹 茉莉

加藤 芙実

河井 麻菜

勘定 聖加

栗田 玲奈

西 真帆

深田 悦代

「餅的伝説」考

『齋宮女御集』考—徽子女王と伊勢の関係—

『千と千尋の神隠し』と風俗産業の関係性

狐憑き研究史

—「農村」における既婚女性の心因性ストレス—

光堂の句考

文学作品における喪服—「藤衣」の誕生とその表現効果—

平安貴族女性の美学—平安期の美人の特徴とは—

八重葎—「男に捨てられた女の家」を表すのか—

律令国家における日本の婚姻関係について

—妻妾の扱われ方を中心に—

近世美人論—江戸時代と現代の「美人」に相違はあるのか—

近松世話物『冥途の飛脚』における改作の変遷について

—「封印切の場」と「新口村の場」を中心に—

『東海道四谷怪談』における「髪梳き」の効果

—お岩を中心に—

近松世話物『堀川波鼓』論

—姉妹関係と手紙がもたらす効果—

近松世話物における和歌の物語への効果

—『五十年忌歌念仏』を中心に—

釘宮 千春

谷水 紫恩

津野 紘菜

坪田 実桜

中村 綾音

橋本 霞

東田 実千

船木 惟那

松原 真結

松本有紀子

太田 百香

大塚万里那

奥野 遼奈

菅野 史織

近世

頓阿考—故きを温ねて新しきを知る—

猫の妖怪化について—猫股を中心に—

大竹 杏奈

清原 悠加

『女殺油地獄』論 — 「地獄」の物語を読み解く—

幸村 蒼依

近松世話物『卯月紅葉』『卯月の潤色』論

山本亜里咲

『大経師昔暦』論 — おさんは本当に真女なのか—

新 梨里

— 「帯」と「心の色」の考察—

『山崎与次兵衛寿の門松』論

新城 采音

『女殺油地獄』における地獄の表現がもたらす効果

吉江 桃花

— 登場人物と「門松」「松」の関連性—

近松世話物『心中天の網島』太兵衛の境遇の設定とその効果

— 近松世話物の他の恋敵との比較を通して—

西倉 風花

近代

赤本『枯木花さかせ親仁』論

橋本 希美

岡本かの子の「食」の扱い — 「家霊」と「鱈」において— 柏原 侑佳

— 犬の役割と読者に与える影響—

近松世話物における「闇」と「親子の情愛」

増野あゆみ

遠藤周作「母なるもの」考

田川 咲恵

— 『心中万年草』を中心に—

『化物よめ入り』論

三浦加奈子

「夜叉ヶ池」の〈主たる者〉と〈恋〉

竹原美紗貴

— 登場物の描き分けによって得られる効果—

『心中天の網島』における妻の嫉妬と独自性

三阪 雪乃

泉鏡花「外科室」論

橋口 京佳

— 『傾城禁短気』と『心中重井筒』との比較を中心に—

赤本『ばけ物よめ入』の嫁入り絵本における独自性

南村 真由

— 商人体の若者の会話が表示夫人の美—

— 石打ちの場面について—

黄表紙『桃太郎後日晰』における昔話のパロディ化

柳下 由佳

鏡花文学における藤色 — 明治期の作品から— 早川 友菜

— 赤本『桃太郎昔語』との比較を通して—

近松世話物における遊女の「恥」意識

山口 鈴夏

泉鏡花「葉草取」論 — 〈紅い花〉について— 藤本早耶香

— 『冥途の飛脚』遊女梅川を中心に—

雑誌『婦人画報』から見る明治・大正時代の夏の化粧について 阿部 真絢

太宰治「二十世紀旗手」と西脇順三郎「ESTHETIQUE FORAINE」(「純粹芸術の批判」) 五十嵐奈々

村上春樹「バースデイ・ガール」論

井上 優果

「竹」の漢文表現とかぐや姫の人物造形についての考察

安部公房「デンドロカカリヤ」論

川上 雪乃

渡部ちはや

—リルケの影響と改訂理由—

江戸川乱歩『蟲』—木下芙蓉殺害の動機について—

北川 由貴

ペット葬にみるペットとの関係

林 果蓮

芥川龍之介「馬の脚」論

山東佑里子

国 語 学

島崎藤村「嵐」の四人の子どもたちの成長について

鈴木 麻莉

—童話作品と関連させて—

梶井基次郎「櫻の樹の下には」の形態に込められた意味

高野 沙月

入善町の方言の現状—アンケート結果をもとに—

永井 優実

中原中也『在りし日の歌』における「子供」

田北真智子

湖東方言—中学生のアンケートをもとにした現状調査—

野田 彩香

—『山羊の歌』と比較して—

太宰治「新樹の言葉」論

中岡 萌々

福島県安達地域の方言について

武藤 杏奈

—侘しさを生きる兄妹の物語—

太宰治「玩具」論

和久 雪子

—中学生と教員のアンケートを通して—

柳沢はる香

夏目漱石『門』論—安井の存在について—

萬木 彩乃

NEWSの歌詞分析

今西 里奈

漢 文

高潔な精神を持つ「鶴」—白居易を中心に—

吉川さくら

—明治から現代までの「ボクっ娘」の歴史—

岩崎 友江

大江佐国の不遇意識

中島菜奈美

—方言教育の実態と中高生の方言に対する認識—

「ジェンダー」の語誌から見る日本の人権意識の更新

薔薇考—美女に譬えられる薔薇について—

巻田 奏

—SNS時代における言葉の拡散の変化—

扇田 捺未

「打ち言葉」における「笑」・「w」・「草」の比較

大山 稜華

色彩に関する言語表現と視覚情報の差異はなぜ起こるのか

海保 菜里

接尾語ヤカと現代語におけるヤカ型形容動詞に関する考察

北村 汐里

若年層における富山方言の使用実態

貴堂 杏香

— 終助詞「チャ」を中心に —

心情を表現する若者言葉の経年変化

久保 柚季

— 『現代用語の基礎知識』の正確性 —

役割語としての田舎ことば

栗栖 朋香

— 木下順二作品に普遍的方言をみる —

和歌山県南部における方言の使用実態について

小山 咲

— アスベクト表現を中心に —

バイト敬語の使用状況と使用意識について

澤山 彩綺

太平洋戦争下における新聞紙面の言語表現の変遷

塩田 朱音

接尾辞ミの新しい用法について

丈達 悠希

— アンケート調査をもとに —

愛媛県方言文末詞「テヤ」の用法 — 八幡浜市を中心に —

仙波佑希子

現代における動詞「つく」の意味分析

高城優衣子

日本統治時代における台湾日本語教育

豎山 優香

— 台湾国語教科書から考える植民地教育 —

「奥の細道図」からみる与謝蕪村の仮名文字遣い

田中 琴子

歌語「星」の展開 — 『万葉集』と二十一代集を中心に — 西川 希

『春昼』における植物描写のはたらき

日本語ラップの特徴

— DOBERMAN INFINITYの場合 —

高額紙幣使用時の断り表現

若年層関西方言話者における待遇表現

— ハルとヨルに注目して —

比喩表現から読む『荒野』

助動詞「みたいだ」の婉曲用法について

— 「みたようだ」から「みたいだ」への変化 —

香りを表現する言葉

— 売り手と買い手の語意識のギャップから —

「なおす」の分析 — 「修理する」と方言を中心に —

小学生が学習する慣用句 — 実際の本の慣用句と比べて —

香川方言におけるナ行終助詞について

— アンケート調査からの検討 —

日本の流行歌における当て字について

原田 那月

平井 希実

福島 未柚

本多 彩香

松山侑里香

元永 梨紗

柳沼 萌生

山崎 菜々

山崎 優希

吉岡 麗

吉田 優子

『女子大國文』投稿規定

一、(投稿資格)

- ① 京都女子大学国文学会の会員は投稿することができる。
- ② 京都女子大学国文学会の会員以外の者も、編集事務局の判断で寄稿を認める。

二、(刊行回数・時期・投稿の締め切り)

- ① 毎年二回、九月と二月に刊行する。
- ② 毎年、五月十日と九月三十日を投稿の締め切りとする(厳守)。

三、(投稿の枚数)

枚数は原則として自由であるが、四百字詰原稿用紙、四十枚(注・表・図版などを含む)を目安とする。また、完全原稿であることを原則とする(多少の加筆訂正はやむを得ないが、段落や章の差し替えなど大幅な修正を加えたものは、査読を行う関係上不可)。

四、(投稿に際して提出すべきもの)

① 手書き原稿の場合、投稿原稿二部(審査用。二部ともコピーしたもので可)。

② ワープロ原稿の場合、プリントアウトしたものの二部(審査用)と、投稿原稿が収められている電子データ(ワープロ専用機の場合は機種、パソコンを使用の場合はワープロソフト名を通知すること)。

五、(投稿に際しての注意事項)

① 論文末尾に所属、回生、卒業年度などを丸ガッコに括弧で記すこと。本学の教員・院生・学生の場合は、(本学教授)(本学大学院博士後期課程)(本学文学部国文学科四回生)などと記す。

② 連絡先の住所を記した別紙を添えること(採否の知らせや校正送付等のため)。その際、投稿原稿についての連絡事項をすみやかに行うために、差し支えなければ、電話番号・ファックス番号・メールアドレスなども添えること。内部の教員・院生・学生は直接原稿のやりとりをするので、住所は不要だが、必要に応じて電話番号やメールアドレスを『女子大國文』編集事務局から聞くことがある。これらの個人情報については、投稿原稿についての連絡以外に使用す

ることはしない。

集事務局まで連絡すること。

六、(投稿先)

〒六〇五―八五〇―一 京都市東山区今熊野北日吉町三五番地

京都女子大学国文学会

『女子大國文』編集事務局

七、(投稿論文の採否)

投稿論文の採否は、編集委員の査読、または関連分野の外部研究者査読の結果を経て、編集委員会にて決定し、結果を投稿者に通知する。

八、(校正)

校正は原則として、再校までとする。校正段階での大幅な修正は、査読を経た関係上認められない。

九、(本誌・抜き刷りの贈呈)

投稿論文が掲載された場合、本誌二部、抜き刷り三十部を贈呈する。増刷希望の場合は、実費執筆者負担で受け付けるので、採用の通知を受けてからすみやかに『女子大國文』編

十、(掲載論文の著作権及び電子媒体による公開)

本誌に掲載された論文等については著作権の複製権・公衆送信権を京都女子大学国文学会及び京都女子大学に許諾するものとする。但し、著作権の移動はなく、著作者は両者、或いはいずれか一方への許諾をいつでも取り消すことができる。

本誌に掲載された論文等の全文又は一部を電子化し、京都女子大学学術情報リポジトリサーバ、或いはその他のコンピュータネットワーク上で公開することがある。

十一、(規定の改正)

- ① 本規定の改正は、会員の議決を経なければならない。
- ② 規定の改正の結果は、すみやかに本誌に掲載する。

附則

本投稿規定は平成十八年三月二十日より施行する。

本投稿規定は平成二十三年十月五日より一部改正施行する。

本投稿規定は平成二十四年十月二十四日より一部改正施行する。

編集後記

今号の査読委員は次の方々です。

池原陽斉・大谷俊太・川島朋子・小山順子・中島和歌子

以上の各氏に査読を依頼し、編集委員会において査読の結果を報告、審議の結果二点が掲載となりました。

今後とも、会員の皆様の投稿をお待ちしております。

(山中・峯村)